

## 9.1 野分と台風

明日 9 月 1 日は、二百十日。立春から数えて 210 日目。

旧暦 8 月 1 日の八朔の日（今年は 8 月 29 日）、二百二十日と並んで、農作の三大厄日とされています。

しかし、実際には、台風の上陸が多いのは、9 月 17 日と 26 日。

少しずれていますね。昔と違って、近年太平洋高気圧の力が強くなっていますので、それが弱った頃に、太平洋高気圧の縁を回り込むようにやって来る台風も遅れ勝ちということでしょうか。

今年は、少し太平洋高気圧の撤退が早いので、天気予報を見る限り、9 月のはじめに台風が直撃しそうです。

戦後まもなく、戦争で国土が荒廃していた頃は、台風で大きな被害が続出しました。

戦時中、河川の整備が中断していたために、至る所で、堤防が決壊し、毎年のように街々は濁流に浸かり、多くの人々が亡くなったのですが、最近では、台風が来ても、そんなことになることは滅多になく、人が亡くなるのは、土砂崩れによる場合だけになっていますね。これは、戦後の人口増加に伴い、昔であれば、決して家屋を建てないようなところに家を建てるようになったこと、それに手入れをしなくなった里山の荒廃が原因です。

自然は、人が手を抜いたところを決して見過ごしませんから、まあ、その殆どが人災というか、人間様の自業自得なのですけどね。

ところで、私が小さな頃、学校で、台風という日本語からタイフーン (typhoon) という言葉が生まれたということを知った記憶があるのですが、その後、大学時代に調べてみると、これは全くの出鱈目で、がっかりしたことを思い出します。

そもそも、わが国で台風 (たいふう) という言葉が使われ出したのは、明治時代以降のことらしい。

それも、最初は、疾風のことを指す「颶風」或いは「颱風」を (ぐふう) と読んでいたのが、戦後、当用漢字の制限から、颶に代えて台を使ったため、台風になったという経緯があるみたい。

台という字には、大きいという意味はありませんので、どうせなら、大風とひとけばよかったのにねえ、そう思いませんか？

それとも、「台」は気象台の「台」絡みで外せない？

では、「たいふう」という言葉の語源は？

これは、説が分かれているようですね。

ものの本によると、

一番、文学的なのは、ギリシャ神話によるもので、恐ろしく巨大な怪物として知られる風の神、テュポン (Typhon) に由来するというものです。

下の写真はテュポンの壺。なにやらおどろおどろしい。



次が、一番現実的に思えますが、アラビア語で、嵐を意味する「tufan」がアジアに伝わり、「颱風」となり、英語で「typhoon」（タイフーン）と呼ばれたというもの。

最後が、実際に今でも台風によく襲われる台湾、福建などで、大風（タイホン）と呼ばれたものに由来すると言うもの。これはリージョナルですね。

いずれにせよ、明治時代、台風は、颱風と並んで「タイフーン」とカタカナで書かれていたようですから、外来語だったんですね。

では、それまで日本では、なんと呼ばれていたのか？

「野分（のわき）」ですね。

「野分」という言葉には、台風やタイフーン、ハリケーン、トルネードといった言葉にはない、ある種の自然に対する「いとおしさ」の心が感じられますね。

あるとき、突然やってくる強い風。

野の草を吹き分けて、時には生活に被害を与えるけれど、大切な水の恵みや豊穡をもたらしてくれる風。

昔の人は、野分を風神のせいだと考えていました。

ですから、風神さまにお願いをする。

私達も行いを改めますから、どうか被害をできるだけ少なくしてください。このような祈りを込めて、風神を送り出すのが、「風祭り」。

越中八尾の風の盆は、静かに風神を敬いつつ、風神の心をなだめる祭りなんですね。



野分は、恐ろしいけれど、私達の先祖にはなくてはならないものとして位置づけられました。

源氏物語第 28 帖「野分」では、夕霧が、野分を案じて外を覗く紫の上を垣間見るシーンが印象的です。また、枕草子で清少納言が野分の吹いた次の日の様子を語っているのもよく知られています。

「野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。立蔀・透垣などの乱れたるに、前栽などもいと心苦しげなり。大きな木どもも倒れ、枝など吹き折られたるが、萩・女郎花などの上に、横ろばひ伏せる、いと思わずなり」(188 段)

でも、私が好きなのは、与謝蕪村の次の句。

鳥羽殿へ 五六騎急ぐ 野分かな

強風について鳥羽の離宮に駆けていく武者の姿が見え、カッ、カッという蹄の音が聞こえてくるような、保元の乱の勃発直前の不穏な様子が伝わってくる句です。

## 9.10 不真面目な書記と心太

いつまで経っても涼しくなりませんねえ。

私、この夏はかつてないほど体調不良で、9月に入ってから、食欲はない、やる気が起こらない（これはいつものこと？）、身体がだるく頭が重い、散歩にでるとふらつく、微熱が出る、等々の症状に悩まされて、殆どKO寸前です。

なのに、非情にも、頼まれ原稿の締め切りは迫ってくる。

9月がこんなに暑いというのは締め切り変更の理由にはならないようで、ダウン寸前というこちら側の事情をいくら申し立てても、「いやー大変ですけど頑張って下さいね」、でおしまい。

そんな中、恩師から上京するので会えないかという知らせが入って、先日、34度の猛暑の中、ひよろひよろと東京駅まで迎えにいきました。

とても急行電車で立って行けそうもないので、各駅停車で坐っていこうと予定より1時間も前に家を出たのですが、どういうわけか乗り継ぎが良くて東京駅に着いたら新幹線の到着まで40分以上もあるではないですか。

いつもだとスタバに入って、珈琲を飲みながら本を読んで時間を潰すのですが、体調のせいか、ドーシテモ珈琲を飲む気にならない。

で、東京駅大丸の上にある「都路里」に行くことにしました。

都路里？

とろり？ 何？ それ、

これ、「つじり」って読むのですが、日本茶の喫茶店、つまり茶寮（さりょう）。

不思議なことに、体調の悪いときでも、日本茶は飲めるんですねえ。

「つじり」は、辻利と書けば、あーと思い当たる方もいるかも知れない、京都祇園の老舗の茶舗「辻利」の出している喫茶店ですね。

時間帯が悪いと、都路里は満員のことがよくあるのですが、この日は、カウンター席はがら空きで、助かりました。

坐ってメニューを見ると、飛び込んできたのが「ところ天」。

一も二もなく、お茶を「ところ天」に変更しました。

都路里は京都の店だから、ところ天は黒蜜がけ？ と思うと、さすが茶寮、抹茶蜜がけもありましたし、関東風に酢がけもありました。

私、幼い頃に関西で暮らしていたこともあって、ところ天は、酢より黒蜜派なんですけど、この日は抹茶蜜。

抹茶蜜がけは初めてでしたが、なかなかいけました。下の写真で、お盆の右上に乗って

るのが抹茶蜜。



ところで、ところ天は漢字で書くと「心太」。

これは、さすがに、漢字当てクイズにときどき出るから知ってますよね。

でもね、心太がどうして「ところてん」と読まれるようになったかについては、私、どうしても多数説に納得できないで、昔からブツブツ言ってるんですが、まあ、聞いてください。

心太は、昔「こころぶと」といわれていたのが、次第に「こころぶと」→「こころてい」→「こころてん」→「ところてん」と読まれるようになったというのが、通説？なんですが、これ、どう見ても無理があると思いませんか？

そもそも、ところてんは、奈良時代から日本にあって、正倉院書物では「心天」と書かれているのですね。読み方が「こころてん」から「ところてん」に変わるのには納得できませんから、問題は漢字の方です。

私、密かに、これは「心天」と書かれてある書物を書き写す際に、おっちょこちょいな書記か、ずぼらな書記がいて、天の字の上の横棒一を「丶」にしてしまったのじゃないかと思っていますのですね。

つまり、「天」が「太」になったのは、暑さにめげた奈良時代の書記官のせい。

どうですかね。

え、「犬」でなくて「太」でよかった？

ところてんの原料は、ご承知の通り、「テングサ」。これは「ところてんぐさ」の略で、古くは「凝藻葉（こるもは）」。

凝は固まるから、藻は海藻。テングサは海草ではなくて、海藻なんですね。

どう違うかって？

海草は、顕花植物で花が咲いて種ができて増えるのに対して、海藻は隠花植物で孢子で増えるのの違い。昔の人はよく見てますねえ。

テングサ（草）と命名した人は反省して欲しいものです。

ついでに、ところてんと寒天の違いは、ところてんを凍らせて干して水分を抜いたものが寒天。

でも、最近、天突きに入れて押し出したものが「ところてん」。それ以外のものは「寒天」といわれているようですね。

ところてん式という言葉の影響は大きいようです。

いつものように、下らないことを思い出しながら、都路里のところてんをいただきました。

清滝の 水汲みよせて ところてん 芭蕉

## 9.12 月見団子

今日は、旧暦8月15日。ご存じ、中秋の名月を観る日です。

今年は、まだ夏の名残が強く残っていて、私の住む辺りでは芒はまだ穂を出していませんが、さすがに、月が中天高く上がる頃には、風は肌に気持ちよく、虫の声も秋の気配を感じさせます。

月見と言えば、月見団子と月見酒。

先日、江戸の単身赴任のお話で登場した紀州藩士酒井伴四郎クンも、出入りの商人から貰った白玉粉で団子を拵えて、同輩達に配っています。

立派ですねえ、というより、単身なのによくやりますねえ。

ところで、この月見団子ですが、関西と関東では、形が違います。ご存じですよええ。

関東は、ピンポン球のような大きさの小団子を15個。三方に載せて供えるのですが、関西は、里芋の形をしたお団子。



元々は、収穫した里芋に味噌を付けて一口で食べられるように衣かつぎにしたものを供えていたのですから、当然関西の方が伝統に沿ったものと言えますが、最近は里芋の形をした団子に小豆あんをくるりと巻いたものになっていますので、伝統的評価としては五十歩百歩。

でも、食べてどちらが美味しいかと言えば、関西の餡付きの方ですね。

ところで、江戸時代の風俗を描いた草紙を見ていて気付いたのですが、月見団子がイヤに大きいのですね。下の絵。



作っている女性の手と比較すると、テニスボールくらいありそうです。

これを15個供えようと思うと、かなり大きな三方が必要ですから、たんに誇張して描いたのだらうと思っていたのですが、あるとき、偶然に江戸の月見の様子を描いた絵を見る機会があって、その絵の中の大きな三方に、これでもかという風にうずたかく積み上げられている月見団子を発見。

解説には、「月見団子、径二寸余、15個を盛る」とありました。

径二寸？ 7cmくらいですね。

また、別の本では、「團子は 大きき径三寸五分位より小さきは二寸餘とす。此團子に 尾花女郎花等を添へたり。當日前より米を臼にて引き 團子の粉を作り 十五日朝未明より家内打揃ひて製するを 吉祥としたり。」とありました。

直径三寸五分というと、12センチですから、ソフトボールくらいの大きさで、大小2種類、前の日から家族全員で作っていたようです。



では、今のようにピンポン球の大きさになったのは、いつ頃？

調べてみますと、次のような記述が見つかりました。

「月に供ふる團子の外に 小團子を製し 一人に付 數十五箇づつに 柿栗等を添へて配分するより 家中多人數ある家にては いと澤山に製したり。」

つまり、御供え用の月見団子と家族や従業員が月を見ながら食べるものとは別に作ったんですね。

こちらの方の月見団子が、現在の月見団子のルーツのようです。

先の伴四郎クン日記では「鉄砲玉」と呼ばれていました。

え、お供え用の大きい月見団子は、このあとどうするのかって？

次の日に、輪切りにして団子汁にして食べたようです。

それにしても、団子汁にしても、ソフトボール15個分、この後何日食べ続けなきゃいけないかなと思ったりすると、今はピンポン球でよかったなあと思います。。



あ、そうそう、今日の月をご覧になる方、旧暦 9 月 13 日の十三夜の月もお忘れなく。  
どちらか一方の月しか見ないことを「片見の月」というのですが、余り縁起がよくないと  
されていますので。

ちなみに今年の十三夜は、10 月 9 日の日曜です。

では、良い月の宴を。いや、良いお月見を。

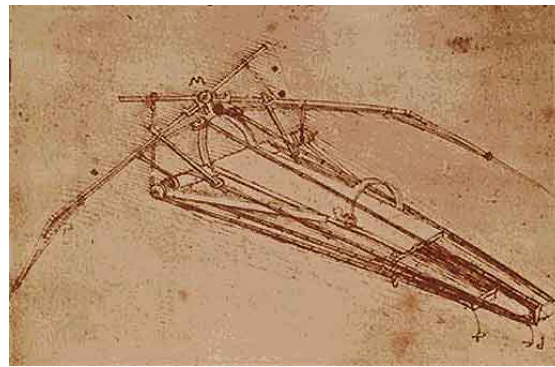
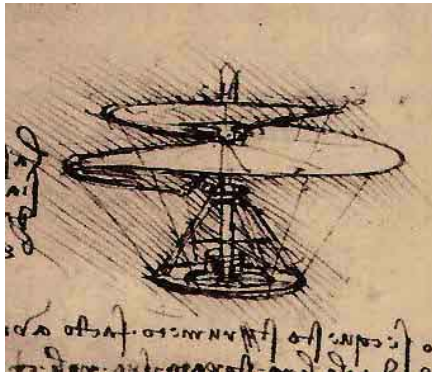
## 9.20 空の日

今日 9 月 20 日は「空の日」だそうです。

「海の日」と違って、余り知られていませんね。  
どうしてでしょうね。

鳥のように空を飛ぶことは、古代からの人の夢でした。

ルネサンス時代の天才、レオナルド・ダ・ヴィンチも、空への憧れを隠さず、ヘリコプターや羽ばたき飛行機的设计図を何枚も残していることは有名ですね。写真



ダ・ヴィンチの優れた頭脳は、鳥のように上肢で羽を動かして飛ぶことは不可能ということを見出しており、彼は足踏み式人力飛行機を検討しています。当時は、軽い物質がなかったために飛ぶことはできなかったのですが、最近の鳥人間コンテストで、足踏み式的人力飛行機が何kmも飛ぶのを見ていますと、ダ・ヴィンチの認識は正しいものだったことがわかります。

ところで、人が初めて、空を飛んだのは、1783 年 11 月 21 日。場所はパリ。熱気球によるものでした。

ところが、それから僅かに 10 年後、フランス革命でブルボン王朝を打倒したフランス共和国軍は、人の空を飛びたいという素朴な憧れを踏みにじり、気球の軍事転用を図ります。1793 年、人を乗せた気球は、敵軍の偵察に使われるのです。

私が、空の日を素直に祝えないのは、空を飛ぶという人間の憧れを、なんの躊躇もなく戦

の手段として使ったということに少し憤りのようなものを感じるからだと思います。また、この戦争手段は、抵抗できない多くの人を命を無差別に奪うというところがあり、実際に多くの普通の市民の命が失われたという思いが私の中にあるからではないかと思

います。それほど、飛行機の歴史は、戦争の歴史と重なっています。

ライト兄弟が動力飛行をしたのは、1903 年 12 月 17 日。

このときは、僅かに 1 分弱、852 フィートの飛行に過ぎませんでした。

日本で、初めて動力飛行に成功したのは、1910年12月19日。

場所は代々木練兵場、今の代々木公園で、徳川、日野という二人の陸軍軍人によるものでした。高度は70㍎、滞空時間は4分、距離にして3000㍎の僅かな飛行です。

写真は徳川機



しかし、その翌年の1911年10月23日、ライト兄弟が初めて空を飛んでから僅かに8年、飛行機は、戦争で使用されることとなります。場所はリビア、イタリア・トルコ戦争でした。

日本はどうだったのか？

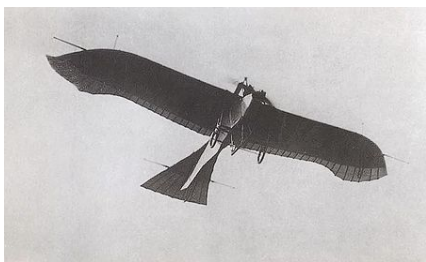
この新しい武器を使いたくて仕方がなかった軍は、4年後に起こった第一次世界大戦で、飛行機を戦闘に投入します。

といっても、主戦場はヨーロッパ、アジアでは、中国の青島（チンタオ）のドイツ領しかありませんでしたので、その攻撃に向かわせるのです。

しかし、ドイツの青島守備隊は、飛行機を持っていました。

1914年10月13日、攻撃に向かった日本軍機4機は、青島上空で、ドイツ軍機1機と遭遇し、初の空中戦が始まります。

記録によれば、ドイツ軍機のパイロットはギュンター・プリュショウ、機は最新鋭のルンプラー機。写真



普通は、4対1の空中戦では、ドイツ軍機の勝ち目はありません。

しかし、どうも、このギュンター・プリュショウ君、相当の腕の持ち主だったらしく、日本軍機を翻弄したようです。

空中戦では、双方ともに機銃を使用しています。日本軍機は損傷を受けていますが、撃ち落とされなかったのが不思議です。

この空中戦は、世界的に殆ど例がなかったために、大変注目され、その後の戦闘機の急激な使用につながっていきます。

なお、青島はまもなく陥落するのですが、ギュンター・プリュシヨウ君のルンプラー機は、日本軍機を尻目に上海に脱出しています。

日本が関係した最初の空中戦で、死者が出なかったことを良しとしますかね。

その後の飛行機の歴史は、ご存じの通りです。

常に、軍用機の開発が飛行機の歴史をリードしてきました。

今、平和な日本の空高く、白い雲を引いて飛ぶ飛行機の姿を見ても、戦を感じることはありません。

でも、日本の立体空域図を見ると、その多くが米軍の管制の下にあることがイヤでも目に入ります。

中国が空母を持つという報道を聞く度に、不安が頭をもたげてくるこの頃です。

## 9.27 虫聴きの会

私の住んでいる横浜は、人口 370 万の大都市なのですが、横浜駅、桜木町駅などを中心とする商業業務ゾーンの都心区と、その周りを取り巻いている青葉、緑、瀬谷、金沢区などといった郊外区に代表される住宅市街地に大きく二分されています。

全国の方が横浜と聞いて思い浮かべるのは、ハマの港、中華街のイメージですが、横浜発展の要因となったのは、なんと言っても新橋-横浜間の鉄道と港の大栈橋でしょうか。

この明治初期の横浜駅は、今の桜木町駅。

大栈橋までは歩いて 10 分程度です。

海側には、横浜球場、県庁市役所など人が集まる施設が沢山ありますので、現在は、桜木町で降りる方の殆どが、海側に向かいます。

それに対して、山側は文化施設などが集まった市街地で、街ゆく人はまばらです。

歩いて登ってすぐのところに「掃部山（かもんやま）公園」がありますが、先日、ここで虫聴きの会が行われました。

この掃部山公園は、幕末の彦根藩主、井伊掃部頭直弼に因んだものです。そうです、あの桜田門の変で水戸浪士に暗殺された井伊直弼です。



どうしてここに井伊直弼が？

幕末の歴史に強い方はよくご存じのように、井伊直弼は開国派の大老で、彼の開国方針に基づいて横浜が開港したことから、明治の初期に彦根藩士達がこの丘を買い取って、その後横浜市に寄付したのです。

それはさておき、肝心の虫聴きの会ですが、残念ながら、虫の数より人の数が明らかに多い。そこここに籠に入った鈴虫などがいたようですが、なんだかお祭りムード一杯で、これホントに虫聴きの会？

これで、虫の声が聞こえたら、奇跡です。

やはり、虫聴きの会は、大名屋敷や大邸宅の静かな庭で、少人数でしなきゃダメだなあと試してみても、いまどきそんなところはないし、どこでやっても参加人数限定しなきゃあ

どうにもならない。かといって、椿山荘で何万も払って聴きたいとも思わないし。

虫聴きの会からしばらく後に、我が家に来た友人をバス停まで送りがてら、酔いを覚ましに××山公園を抜けていたら、なんと、辺りは秋の虫の大合唱会。

灯台もと暗し。虫聴きの会なんて、行く必要なんかなかった。  
しばらく聴いていると、こころが澄んできて、贅沢な気持ちになってきます。

ただ、この虫聴き、難点が幾つかあって、まず私にはなんの虫の声かが分からないし、立ち止まっていると蚊に刺されるし、一人だと痴漢に間違えられそう。

そういえば、公園の入り口に「痴漢にご注意！」って看板あったなあ。  
懐中電灯もって、怪しいものではありませんってプラカード持つわけにもいかないし。

ところで、私の一番好きな虫の声は、松虫。  
松虫の声って聴いたことありますか？

文部省唱歌「虫の声」では、  
♪ あれ、松虫が鳴き出した、ちんちろ、ちんちろ、ちんちろりん  
ですね。

私には、ちっちり、ちっちりとしか聞こえないのですけどね。  
これは、耳の能力のせいかも知れない。

**松虫や 素湯（さゆ）も ちんちん ちろりんと（一茶）**

と詠まれているし、なんといっても松虫は、万葉では、その声から鈴虫と呼ばれていたほど、鈴を転がす音に近いとされていたようですから。

松虫は、今の鈴虫と違って、養殖（？）が難しいらしく、なかなか本物の声を聴く機会がありません。

**秋の野に 人まつ虫の 声すなり われかとゆきて いざとむらわん（古今）**

もう二度と会えなくなった亡き友を偲ぶよすがとなる松虫の声です。

## 8.28 蟬とキリギリス

お盆を過ぎてもひどい暑さが続く今年の夏ですが、それでも季節は確実に秋に向かっていくようで、蟬の声に「つくつく法師」が混じるようになってきました。

今はどうか知りませんが、私が子供の頃は、夏休みに入ると、朝ご飯もそこそこに、勉強は？という母親の声を後ろに聞いて、網を片手に蟬やトンボを追いかけ回すのが日課でしたが、蟬を採り損なって、蟬から「おしっこ」を引っかけられたことも、今では懐かしい夏の思い出です。

これが目に入ると、誰が言ったか、目が潰れてしまうというので、慌てて家に飛んで帰って、目を洗ったものです。

「蟬の小便、木(気)にかかる」と言いますが、大学生になってからも気になって、生物学の本を読みますと、蟬のおしっこは、その殆どが木の樹液で、有害な成分は全く入っていないと書いてありました。なぜか、ほっとしたものでした。

ところで、子供の頃、私達が学校で教わった蟬の一生は、母親ゼミが木の皮に生み付けた卵から孵った幼虫は、木から降りて地下に潜り、7年間地下生活をしたうえで、夏のある日地上に表れ、7日間命の限り鳴き続け、死んでいくというものでした。

ですから、子供心にも、蟬はどこか儂いものという気持ちがあって、せっかく採った蟬を夕方には放してやったものです。

でも、これは、全くの俗説で、地上に出てからも、蟬は1ヶ月以上、生きるのですね。そのことを知ったのは、社会人になってからでしたが、この儂いイメージで蟬は随分得をしているようです。命拾いをした蟬も沢山いるのでしょうね。

少し前に「八日目の蟬」という映画がありましたが、この題名も、八日目の蟬は7日間しか生きない普通の蟬が見ることの出来ないものを見ることが出来るというところからきているようですから、この俗説はこんなところにまで影響を及ぼしているですね。

でも、おそらく、これは、

**やがて死ぬ けしきは見えず 蟬の声 (芭蕉)**

から採られたものでしょうから、無粋なことをいうのは止めておきましょう。

無粋と言え、ご存知かも知れませんが、誰でもご存知の芭蕉の句を巡って、昔、「山寺蟬論争」というのがありました。

**閑かさや 岩にしみいる 蟬の声**

「山寺蟬論争」というのは、この蟬が何蟬なのかということ巡って起きたもので、私達にとってはどうでもいいんじゃないのと思うようなものですけどね。

どうです、みなさん、何ゼミといますか？

ミンミン蝉？

アブラ蝉？

それとも蝸？

この論争は、アブラゼミと主張する斎藤茂吉さん（あの北杜夫のお父さん）とニイニイゼミと主張する芭蕉研究の第一人者小宮豊隆さんとの間で行われましたが、まあお互いメンツをかけた激しいものだったようです。

大人げないですねえ。



結果はどうなったかって？

これ、芭蕉クンが山寺を訪ねた日がわかっていますから、実際に調べてみることになったのですが、その時期、山寺ではアブラゼミはまだ鳴いていないことがわかって、斎藤茂吉さんの完敗。

八日目の蝉のようにはいきませんでした。

ところで、蝉の鳴き始めの時期は、桜の開花とは反対で、蝉の多くは、北海道から鳴き始めるのだそうですよ。

知ってました？

どうでもいいか。

さて、蝉は、日本では万葉の昔から詩に詠われてきていますが、なぜか、万葉集ではほぼすべてが「ひぐらし」。

ひぐらしは 時と鳴けども 恋ふらくに たわやめ（手弱女）我れは 時わかず泣く

（万葉巻 10-1982）

[拙訳]

（ひぐらしは、日暮れになると鳴くと決まっていますが、あの方を恋してしまったか弱い女の私は、一日中泣いてばかりいます）



自分から「たわやめ」というのはどうかとは思いますが、「たわやめ」が何かわからないと、この歌、最近の草食男子の歌と間違いそうです。

ところで、夏のヨーロッパでは、蟬の声を聞いたことはありませんね。  
イギリスやドイツやオーストリア、それに北フランスには、蟬がいないのですよ。

イソップ童話「蟻とキリギリス」は、元々「蟻とセミ」だったんですが、イソップのギリシャにはごろごろいるセミも、南欧以外では、「セミ」って何？

ということで、ヨーロッパでは「キリギリス」になったようですよ。  
考えてみると、セミってどこか得してません？  
キリギリスさんも、謂われのない「遊び人」の汚名？を着せられて、迷惑なことですねえ。